

北の鉄道風景

Train number; 3040M

2023.6.12 18:53

1/160, f/6.3, ISO 200, f=24mm, Daylight/Sunny

4779×7468 Raw

第122回

闇の気配

昼の間、草の陰や木々の根元にうずくまっていた闇たちが、陽の光の衰弱を見計らったように躍り出てくる気配――幼い頃、感じる事ができたそんな感覚を偶然捕まえることができた夕暮れだった。

十歳の私は田んぼで夢中になって遊んでいた。友達の顔がだんだん赤みを帯びてきたことで、日が沈みかけていることに気づく。



闇に向かう列車と闇から帰る列車が交錯する夕刻の駅を、最果ての風が吹き抜ける。石北本線 2022

「ガガ様、夕飯つぐるあいだ、おぼこみでねばなんねんだ（子どもの面倒をみてなければいけないんだ）」
少し疲れた背中がそう言い残して、たなびき始めた夕餉の煙の中に薄れていく。あいつは赤ん坊を背負って今からまたひと仕事するのか、と溜息をつきながら見送る自分の顔もきつと赤いのだろう。火照った頬に手を当てながら目を細めると、もう太陽は身を半分隠していた。あいつにくらべりゃ、俺なんて気楽なもんだと自分を少しばかり鼓舞して帰り道につく。

ほどなく日は沈んで、振り向いた西



写真と文＝眞船直樹

の空が真っ赤に焼けるのだが、それを眺める気にはなれない。カエルの声が大きくなりだすと、さっきまで好き放題にさせてくれていた田んぼの寛容な表情がすっかり変わっていることに気づく。これはいけない。何がいけないかと言って、それはわからないが、とにかくいけない。その感覚が次第に全身を支配して、早足になる。意地悪な砂利道は、そんな時に限って、そっとデコボコを作ってつまづかせようとする。

急に風が冷たくなり、道端のフキの陰や、橋のたもとの柳の下の黒い影が大きくなるのを感じる。いけないもの、とはこれなのかと思うが、そんなことはどうでもいい。湧き上がるあの黒いものに包みこまれる前に、明かりが欲しい。そして、やっと目にする街灯に思わずホッとするものの吐息がブルブル震えているのがわかる。ただいまも言わずに家に飛び込んだときの安心感は何ものにも代えがなかった。

現代、こんな気配を味わうのは難しくなったが、探せばあった。それが嬉しくて写真にした。あの気配は知っていて決して損ではない。